

俗世界のパラドクスが生じる理由を明らかにするために必要なのである。

中巻第三話・第九話は、それぞれ『法華経』『提婆達多品』『薬王菩薩本事品』からの引用で、前者は、釈迦菩薩が阿私仙の「奴僕」となって『法華経』を授けられるという本生譚である。後者は、薬王菩薩が自らの身体を燃やして日月淨明德仏を供養するという物語である。ともに、衆生を救うための法を求めて〈自己贈与〉をするという〈捨身〉の物語である。第一一話と第一二話は、ともに自己の生命を賭けた〈布施〉の物語である。生命を分割し、モノに転換して〈贈与〉する〈布施〉も、「信」が備われれば〈自己贈与〉に劣らないことを物語ろうとする説話である。

下巻第二二話と第二三話は、鶴と鹿が自己の生命を賭して子を守る〈自己贈与〉の物語である。下巻には、聞法する鼠や鸚鵡、布施をする猿、経典を運ぶ牛といった、動物が仏道修行をして往生する物語が多い。これらは、動物でさえこれだけのことができるのだから、まして人間は努力して仏道修行に励むべきであるというアレゴリーの物語である。とはいえ、動物は切利天や四天王天に往生しても、諸仏の浄土に往生することはない。そこに人間と動物との分節線が引かれている。

以上のように『注好選』は、社会や制度の創生神話・儒教的な孝子譚・動物のアレゴリーといった世俗世界の〈贈与〉と、〈捨身〉や〈布施〉といった仏教的な〈贈与〉とを比較することによって、大乘仏教の根源について物語ろうとするテキストなのである。

## 『西方発心集』の思想と表現

龍口恭子

『西方発心集』は、法然上人全集(明治三十九年刊)には「附録」に収められ、昭和法然上人全集(昭和三〇年刊)には「第八輯 伝法然書篇」に収められている。しかし既に江戸時代から、文雄の『蓮門経籍録』には「偽妄濫真類」に収められ、泰蔵の『蔵外法要救麦私記』に「偽作」と断ずる等、法然の作という点は疑問視されて来た。一方、真宗高田専修寺に蔵される『西方発心集』が、慶安元年(一六四六)版本と同じ内容であり、書写の筆跡は室町時代の真慧と認められるが、さらに納入袋の筆跡から、顕智の書写の跡が伺えることが専修寺本の影印本公刊と共に明らかにされた。顕智が関わったということから『西方発心集』の成立は少なくとも顕智以前に遡り得る。本論では、本書がどのような立場の人によって書かれたか、思想内容は如何なるものであるか、また表現においてどのような特色を有するものであるか等について検討してみたい。

本書は上下二巻から成り、上巻には、念仏三昧が末世において善悪共に引摺する四十八願の根元であると称揚する。しかるに口には名号を称えながら、心は五塵に染み、外には遁世の相を示しながら、内には名聞の望みを断ちきれない、この「心」について、筆者は法然の教示に沿いながら冷静に分析し、十二の問答によってそれを説き明かす。また下巻でも、上巻同様十二の問答を設け、本願の文の丁寧な解説を試みている。

引用文献は、『無量寿経』『阿弥陀経』『観経疏』『往生要集』『往生拾因』等である。それらの引用は、名利を求めて馳走する罪悪生死の凡夫の姿であり、不浄な人の身に執着を重ねる愚かさを指摘するが、それと呼応しつつ、弥陀の名号不思議を語り、絶え間ない弥陀の計らいによって、臨終には必ず往生の救いに預かるとするのである。

本書の全体的な文章の調子は、対句や韻を踏み、平明な和語を用いながら、耳に心地良く響く叙述を志向しているように思われる。理論的に浄土教の救済の構造を明らかにするという方法をを用いるのではなく、心弱い凡夫、念仏行者として心の散乱する自己を、「ほださる」「かだまし」「まぎらかさる」等の言葉で語る。一方、そのような者を十劫の昔から救済する手立てを講じ給う阿弥陀如来のはたらきを、「こしらふ」「かまふ」「いさむ」「はかる」「すかす」「かたらふ」「たくらふ」等の言葉で表す。これらの語は普通に日常生活の中で使われる和語であるが、念仏行者の立場から見ると、限らない智慧と慈悲によって衆生を救わんとする阿弥陀如来のはたらきを示す語となるのである。かかる使用例は端的に言えば、「進む」<sup>すすむ</sup>と言っているであろう。「進む」とは「ある事をしよう」と、はげむ、決心することであり、また「高い目標に向かって努力すること」であって、念仏の行者にとって、この「進む」は臨終の往生を期して、たゆまず念仏三昧を行ずることである。

かくて「心」を奮い立たせて浄土を願生するその修行者達を『西方発心集』の著者は、上巻では「四つの品」即ち四等に分類する。また下巻では四種を「友」と呼んでいるところに、同

じ念仏行者への呼びかけがあり、そこにこの書の存在理由もあると言えよう。即ち、草庵や、あるいは妻子と共に生活をしながら、念仏中心の生活を送っている者達へ、「進む心」を確認しながら、共に浄土を目指すべく勸奨するのである。

序に「外には通世の相を示せども、内には名聞の望み胸に満つ。言には往生の事を談ずれども思ひは四方に馳す」と述べていることからして、著者は通世者として念仏修行に励む人であり、本論にあげたような語の用例が、『黒谷上人語燈録』に近いことから、比較的早い段階での法然門下ではないかのと推測が可能であろう。

### 『教時問答』における

#### 「一心一心識・一切一心識」について

土倉 宏

安然是『教時問答』(大正七五・三八九下)で次のように述べている。

法華経は一切一心識に約す。故に阿闍・弥陀は是れ他自身、又普賢等は是れ釈迦身には非ずと云うなり。今真言宗は一心一心識に約す。故に四方の四仏、四維の四菩薩は皆大日身なりと云うなり。然るに天台の云く、心・仏・衆生は是れ三にして差別なし、只心は是れ一切の法、只一切の法は是れ心、縦に非ず、横に非ず、一に非ず、異に非ず、芥爾の一心に必ず三千を具す、と。即ち是れ今真言宗の「